

(39) エシリアムの樂園に入らしむるかと思はれ エリシウムは希臘神話の樂園のとて、此上なき幸福の表號である。

(40) シラ感極りすゝり泣きて シラは海神グロカスを慕ひたるが、戀仇サーシーの奸計によりて怪物に化し、その身邊には斷えず吠犬が付き伴ふてゐた。後グロカス之を岩に化した。そして、犬の如く吠ゆる波浪は、常にその周邊に轟いたそうだ。

(41) キャリブデス シ、リー海岸に近き渦巻で、『シラ』の岩に對してゐる。ヴェリテ一の註に據れば、キャリブデスも亦岩の名稱で、シラの巖に相對せりとある。

(42) 少年の神へ、ゼリアス(神)の娘で、神々の前に酒盃を周旋する掌酒子である。少年の美の化身といはる。

(43) 妾はいかで他に移り行くを懼れん。原文には

“In a place less warranted than this, or less secure,
I cannot be, that I should fear to change it.”

とあるが、that以下を譯して「妾はいかで他に移り行くを懼れん」としたのである。さて然らば此「Thatは何であるか關係代名詞か、或は接續詞か、随分疑問の字であるが譯者は結局之は接續詞で、その前に、it is impossible, or it is inconceivable」といふ句の略された形であらうと考へるのである。(つまり前行の文 I cannot be の “Cannot be” 中にその意味を兼ねさせたものと思ふ)。沙翁劇 Tempest I. 2.67; III, 2.36. Mids. II, 2.133. 等參照。

(44) わが試煉をしてわが力にふははしからしめ給へ わが徳の修養を試みんとて、神より受くる試煉をして、わが力相應ならしめ給へとの意である。

(45) 『混沌』をしてその位より退かしめよ。『夜』の闇と『蔭』の暗さて、二重に

暗黒となり、黒白も辨かぬ「混沌」の世界と爲れるところに、雲間より月光を洩らして、わが行く道を照らせかしの意である。

(46) アルカデヤの星 大熊星をいふ。なぜアルカデヤの星と言はるかといへば、アルカデヤの王ライカオンの女カリストが、ジュノーの爲めに大熊星に化せられたからである。

(47) キノシユラの星 キノシユラとは、犬の尾といふ意味で、小熊星の形がそれに似たところから言はれたものである。希臘の航海者は大熊星を目標とし、フェニシヤ人(ツロ)はフェニシヤの港であるは、小熊星中の北斗星を、航海の標的としてゐた。

(48) ヘスベリデースの園に育つ樹に似たり 遠き西方の島にある、美はしき園に育つ林檎樹にして、ジュノー(女神)にしてヘラとも云ふか、ゼーアスと婚するるとき、ゼー(地の神)より贈られしものである。ヘスベリデー

スといふ三人の乙女が、龍の援助の下に、此樹を監視したといふ。

(94) ダイアナ 處女神にして、美と純潔とを以て有名である。狩獵を司る。

(50) キュビット キュビットは幼き男神にして、二種の矢を持つてゐた。

一は黄金の鐵を持ちて愛を引き起さする力あり。一は鉛の鐵で、愛を斥ける魔力があつた。

(51) 羅馬神話中の智慧聰明の女神にして藝術、科學、戦争を司つてゐた希臘神話のアテネと同じ神である。此女神常にゴルゴンの頭を付けたる楯を持つてゐて、彼女を視る者を石に化したといふ。

(52) 蛇頭のゴルゴン ゴルゴンは三つの恐ろしき怪物にして、その頭髮は蛇と爲り、翼と爪と大なる齒を有つてゐた。かの有名なるメデユサは其中の一人である。

(53) 靈はこれに染みて……肉と化し禽獸の卑しきに下りて 此所はミル

註 解

トンが、プラトリーの哲學の一部を紹介してゐるところである。その著 Plato に、ソクラテースが肉體の快樂に耽溺し、全くその情慾に囚はれたる人の靈魂は、肉に同化して死するときも、天に羽化登仙するの能力を失ひ、幽魂永く墳墓の邊に彷徨ふものであると、教へてゐると書いてある。

(54) 恐ろしきキメラや魔の島 キメラは火を吹く怪物にして、獅子の頭、魔の尾、山羊の體を持つてゐた。

魔の島は、ホーマーのオデッシー中にある、サーシーとカリブソの住める處である。

(55) 魔法の女神ヘカテ スレースの女神にして、魔法を司れるものなることは前にあつた。

(56) アケロンの煤の如き旗の下に集へる。アケロンは、もと下界の川の名なりしが、遂に下界一般を指すやうになつた。即ち下界を支配する魔

王の旗下に、馳せ參ずる兵士等といふ義。

(57) ハービー及びハイドラ ハービーは女性の性物にして、長き爪と、瘦せて恐ろしい顔を持つてゐた。

ハイドラは希臘語ハイドール(水の義)から出た字で、水中に棲む蛇の怪物である。

(58) 昔ヘルメスが賢きユーリシスに贈りし (59) モリイ、ユーリシスが、魔女サーシーの家に近いとき、偶まヘルメスに逢ひ、魔を解くに靈驗ある、モリイと呼ぶ藥草を贈られ、辛うじて難を逃れたといふ話は、ホーマーのオデッシーに書いてある。

(60) ヘーモニー ミルトン發明の名である。昔魔法の地として知られたるセサリイは一名ヘーモニアと呼ばれたから、それに因みて、ヘーモニーと名づけたのであらう。

(61) ヴォルカンの子等。羅馬神話中の火の神にして、火の助を必要とする、鍛冶の守護神である。その子等は煙を吐いたといふ。

(62) ダフネの如く木と爲りて地に根を下さん。ダフネは、アルカデアの女神にして、アポロに戀はれて遁れるところを、その父のために桂樹に化せられ、地に根を下したといふ。

(64) 埃及のトリンの妻がジョブの女神ヘレナに贈りし。ヘレナがスバルタに於て、テレマカスを饗應したとき客の掬む杯のうちに、有ゆる苦痛を鎮め、凡ての悲哀を忘れしむる薬を混じたといふ。その薬は埃及のトリンの妻が、ジョブの女なるヘレに贈りしものである。

(64) ネベンセス。苦痛を除くといふ希臘語より出た字で、氣を爽かにする美味なる飲料をネベンセスといふとがある。

(65) ジュノーが饗應に用ふる酒。羅馬神話にあるジュビターの妻にして、

婚姻を司り、且つ女性一生涯の守護と稱せられてゐる。

(66) 小羊の毛皮の頭巾被れるストイツク學者。大學の學位を有てる人の法衣は小羊の毛皮を以て、その上部の縁を飾つてゐるところから、斯く形容したものだ。

(67) ダイオゼネス。紀元前四百十二年—三百廿三年の雅典の學者で、粗食を主義とし、廊下或は街上に於て教へ、後には桶を轉じて、途上に眠食したといふとである。原文には Cynio tub とい言葉を使つてあるが、希臘語の犬に似たるといふ字である。蓋し犬の如く社會の形式や、習慣などに頓着せぬところからかく云ふのである。

(68) 然ればその名もホームリーと云はる。英語のホームリーといふ字は醜きといふ義である。

(69) 處女の純潔の嚴かなる教を説くに。ミルトンがその著 Apology for Sme

註 解

clymneus の中に語るところに據れば、青年時代に高尚なる昔話や物語を讀みて純潔といふとのいかに貴き徳であるかを學び長じて廣く百家の書を涉獵して、一層深く此問題に就て究め、ブラトリーや、ゼノホンなどの、幽玄なる思想を玩味したといことである。

(70) 怒れるジョブが雷を轟かし云々。これはゼイアスとタイタン等の間に行はれた戦を指したので、此戦に於て、ゼイアスは、サイクロプスと呼ばるゝ、一眼の巨人より、雷と電光と貫ひ、それを轟かして、タイタンの仲間を地獄に落し、そこに幽閉したといふ。

(71) メリベス ザアジルの Monologue 中にある、牧人の名である。此所では多分詩人スベンサーを指したと思はれる。サブリーナの物語は、彼の Enrie Queen に記されてある。

(72) セブルン川 ロクリンがハン族の王ハンベルと戦つて勝利を獲澤山

の分捕物あつた中に、若き美しい娘等もあつた。就中エストリリデスと云ふ少女が容色秀れてゐた。之はハンベルが日耳曼より虜として連れ來たものであつた。ロクリン之より先き、コリニアスと云ふ勢力家の女、ゲンドレンをめとるとを約してゐたけれども、エストリリデスの色に迷ひ、之に婚せんと決心した。然しコリニアスに威嚇せられて、表面上は其女を容るゝとを諾し、密かにエストリリデスを愛し、遂にサブリーナと云ふ美しき女子を擧げた。後コリニアス死んで、遠慮する者も無くなつたので、ゲンドレンを離縁し、エストリリデスを公然女王として迎へた。ゲンドレン大に怒つて、その故郷なるコールンウォルに歸り、兼ねて祖父の膝下に育てられ居たる、ブラダンと云ふ自分の息と共に、兵を擧げてロクリンを攻め、遂に死に至らしめた。ゲンドレンの復讐の念未だ止まず、エストリリデスとその娘サブリーナを川に投じ、その娘の記念として、之をセブル

ン川即ちサブリナ川と稱せしめたといふとである。(ブリテン史)
ミルトンの詩に、ゲンドレンをサブリナの繼母としたのは、歴史の記事と
相違するけれどもそれは詩人の作りかへである。

(73) サブリナ 前項に記してある如く、ロクリン王の女にして、エストリリ
デスの出である。

(74) 年老いしネレオス ネレイズと呼ばれる、海の女神等の父にして聰明
なる老人である。

ネレイズの中で有名なるは、アンヒトライトと、セテス二人にして、前者は
ネプチューンの妻となり、後者はアチレスの母となつた。

(75) オシアナス 嚙昔の希臘人は、地球を平面なもので、オシナスと呼ぶ川
に圍繞せられてゐると考へたこの川の神もオシアナスと稱へられた。

(76) テシイ オシアナスの妻にして、多くの川神の母である。大層諸神の

尊敬を受けてゐた。

(77) カイバシアの魔師の杖 これは地中海の一部たる、カイバシアン海に
棲める、プロテオスと云ふ豫言者のとて、ネプチューンの海牛を監督した。

杖は即ち牧者の持つ杖である

(78) トライトン 海の傳令使で、法螺貝を吹て、海神ネプチューンの命令を傳
へた。

(79) 老グロカスバイテヤの漁夫で、海神に化身した。豫言者として漁夫
や航海者の尊敬を受けた。

(80) ルーコシアの美しき手 イノー怒れる夫アサマスに追はれて、その子
メサータと入水した。ネプチューン彼等を海の神と化し、ルーコシア及び
ポルタムナスと呼ばれて、崇敬を受くるに至つた。

(81) 銀の靴はくセテスの足 ネレオスとアチレスの一女で、銀と輝く靴を

穿つたゐた。

(82) サイレンの唱歌 前に記したる如く、川の神アケラオスの娘等にして、
パーセノーブとルーコシアの三人である。シ、リーの海岸に近き岩島
に棲んだ。

(83) パーセノーブ その墓はネーブルにあり。

(84) リジア ヴァジルの詩に、マーメツドの如く巖上に座して、黄金の櫛も
て緑の髪を梳る、海の女神として寫されてゐる。

(85) アンヒトライト (74) にある如くネレオスの女の一人にして、海神ネブ
チュンの妻である。

(86) アンチアイセスの古き血統より アンチアイセスの子、エーニウスは
アスカニアスの父、アスカニアスの子シルピウスは、ブルタスの父、ブルタ
スはロクリンの父である。

(87) 汝が小高き頭の上は 水源地方の山地には、塔や臺など建てられ、堤の
上には没薬肉桂の香はしき森の茂れかしとの意。

(88) マーキユリ、異教國の神にして敏捷と輕快の代表である。

(89) ヘスベラス 地の神アトラスの兄弟にして、アエグル、シンシャ及びヘ
スペリアの三人の娘を有つ。

(90) グレリス ユウフロシンとアグライアと、サリアの三人の女神にして、
孰れも劣らぬ優美さを有てり。

薔薇色の胸の四季の女神 原文にはアワリス *Hortus* と記されてあるが、四
季を代表する女神等である。

(91) 若きアドニス 美しき若きアドニスは、レバノン山に獵して、野猪の爲
めに創痕を受けて死し、女神ゼナスは悲嘆にくれた。神意に依つて、其
後毎年その時期に至れば再び創痕を受けて死し、又蘇生した。そこで年

二度の記念日^{キニンビ}が有つた。一度は悲嘆の日で、一度は歡喜の日であつた。

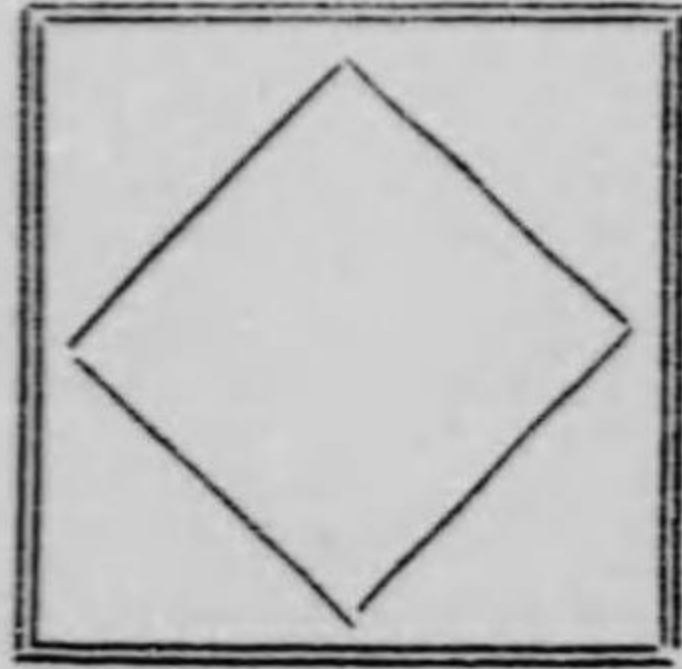
(92) キュビットとサイキの神話は次如し。キュビットはサイキを愛したが、その誰なるかを知らんと求むる勿れと告げた。然るにも係はずサイキは好奇心に驅られて、キュビットの眠れる時、燈火を持つてその傍に寄り添うた。生憎油の一滴落ちて、キュビットは驚き、目醒めて遁去つた。サイキはヴェナスに迫害せられて、諸方に彷徨ひ、幾多の艱難を嘗めて後ち不朽の身と化し、遠へにキュビットの妻と爲た。此話の寓意はサイキは人間の靈魂を指したもので、そが地上の艱難に逢ふて、鍛練せられ、初めて天上の幸福を享くるに適する者と爲ると云ふとを教へたものである。

(93) 天樂を奏する星 星宿が天の軌道を走る時、音樂を奏すると云ふ。

假面劇 コーマス をはり

大正五年十二月五日印刷
大正五年十二月十日發行

假面劇 コーラス
定價七十錢



著 作 權 所 有

著 作 者 菱 沼 平 治

發 行 者 東京市麴町區平河町四丁目十三番地
土 屋 泰 次 郎

印 刷 者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十三番地
青 柳 十 一 郎

發 行 所

東京市麴町區麴町三丁目四番地
丁 未 出 版 社
振替東京七八四七 電話番町二八二〇

357
198

終

